

産業活性化に向けて 農業クラブが貢献できること

北海道ブロック 北海道中標津農業高等学校

食品ビジネス科 3年 笠井 愛里

食品ビジネス科 2年 相馬 誠

食品ビジネス科 3年 清原 璃夢

食品ビジネス科 2年 葛西 理玖

生産技術科 2年 木下 ひなの

【概要説明 北海道農業及び北海道中標津農業高等学校（農業クラブ）について】

私たちの住む北海道は、三方を太平洋、日本海、オホーツク海に囲まれ、農産物や海産物、林産物といった天然資源が豊富であるために、食糧自給率はカロリーベースで約200%と、日本の食糧基地として大きな役割を担っています。また、北海道農業は、1農業経営体あたりの農地面積は他府県の約15倍と、大規模で専門的な農業経営が特徴です。

このように北海道農業は、広大な大地で行われているため、気象条件や土壌性質などは地域によって大きく異なります。そのため、それぞれの地域に合った農業技術の習得が必要とされることから、日本学校農業クラブ北海道連盟では、大きく3つの地域連盟に分かれ、合計31校が加盟しています。

私たちの学び舎、北海道中標津農業高等学校は、札幌市から約400キロ離れた、日本最東端の単置型農業高校です。学科編成は、農畜産物の飼育・花き栽培を学ぶ生産技術科と、食品加工や流通を学ぶ食品ビジネス科の2間口、全校生徒76名の小さな町立学校です。

私たちの郷土、中標津町の基幹産業は放牧型酪農が中心で、人口およそ2万人に対し、乳牛飼養頭数約3万9千頭、生乳生産量は全国第2位の酪農地帯です。

そのため、中農・農クは、まちの基幹産業である「酪農」を担っていくため、私たちが農業従事者・技術者としての資質を高め、クラブ員の“力”を繋げていくことを大きな使命としています。そんな思いから、活動テーマを「中農と地域を見える化～まちに広がる新たな姿～」とし、活動を進めています。

それでは、私たちの実践内容を報告します。



【北海道中標津農業高等学校農業クラブ活動報告】

実践1 地域と歩む先駆者は私たち！繋がる・広がる心の笑顔

生産技術科では、地域のホルスタイン共進会への出場や、町全体で喫緊の課題となっている乳牛の糞尿臭問題を、近隣農家とともに実証実験を展開。また、北海道有数の豊かな牧歌的風景に彩りを添えるため、町内の各所に花壇の造成や花を通じた交流会を行っています。

食品ビジネス科は、電気牧柵の切断や食害といったエゾシカ被害が深刻化していることに着目し、栄養価の高いシカ肉を食肉化するための技術を磨くと同時に、乳製品開発を通じた地産地消の取り組みを実践しています。



本校のある計根別地域を対象とした計根別食育学校は開校 11 周年を迎え、昨年度から小中一貫校の計根別学園が誕生。計根別幼稚園とも連携を図ることで、発達段階に応じた段階的な食農教育を展開しています。そのため、食育学校の卒業生は、本校に進学する生徒も多く、その後の進路も、農業関連企業への就職や進学など、人材の循環も始まっています。これらの取り組みは農水省主催の食育実践者モニターへの登録、そして食料・農業・農村白書に掲載されるなど、新たな歴史を刻んでいます。

さらに、地域の魅力を町外へ伝えるため、研究班活動も飛躍しています。園芸研究班は、札幌市で開催される北海道農業高校生ガーデニングコンテストに出場。まちの文化・伝統をガーデニングで表現したことで、道東地域初の3年連続入賞。

農産加工研究班は、根釧ミルキーレシピコンテストに出場し、地域食材をふんだんに使ったラザニア風クリームパスタが準グランプリを受賞、町内外に大きな注目を浴びました。

また、2011年、本校のマスコットキャラクターとして生まれた「なかのんちゃん」。初めはクラブ員の手作りで制作した着ぐるみも、中標津町や町内企業の支援を得て、スケールアップに成功。現在は、本校のみならず中標津町をPRしていくキャラクターへと成長しました。

これらの取り組みを通してクラブ員の84%が自ら農ク活動を積極的に行動できたと実感。地域とクラブ員が繋がった活動は、これからの郷土を担うリーダーシップへと変わり、さらなる地域振興へと繋がるでしょう。



実践2 農ク執行部が迅速果敢！クラブ員に向けた三大事業改革

私たちが日々取り組んでいる農業クラブ活動。特に、三大大事は農業学習の理解を深めるだけではなく、地域産業を活性化させるための大きなプロセスとなります。

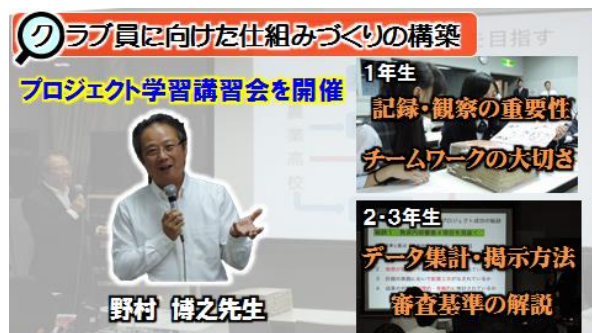
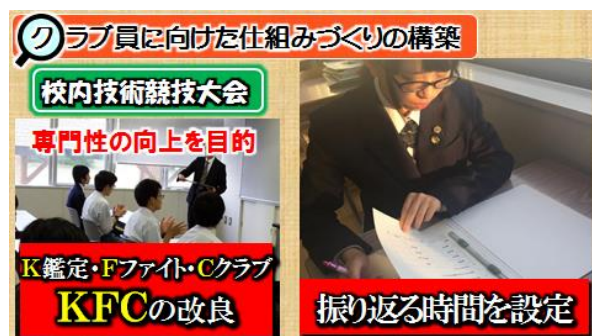
意見発表大会は、地域が抱えている課題や今後の方向性など、農業高校生・未来の後継者だからこそ考える、数多くの意見が集まります。そのため、惜しくも選ばれなかったクラブ員のために「敗者復活枠」を実施。すると、今年度の校内大会では、敗者復活枠で選ばれたクラブ員が全員入賞。地域大会では優秀賞を受賞し、6年ぶりの全道大会の出場権を獲得しました。クラブ員に「敗者復活制度は良いと思いますか？」の問いには、90%が「はい」と答え、一人一人の意識が高まってきていることが分かります。

技術競技大会は、農業鑑定競技の専門性の向上を目指し、「鑑定ファイトクラブ」通称KFCを改良。今年度はKFCが作成した問題に取り組む朝学習を前年度よりも早く始め、ファイルを使って振り返る時間を設定。また、定期的に学習会を開催し、基準書の解説や模擬問題に取り組んだことで、昨年度の全国大会（群馬大会）では、食品科学コースで3年ぶりに優秀賞を受賞しました。

プロジェクト発表会は、クラブ員の関心が高く、大学生が視察に訪れるほど意欲的な大会です。そこで、平成17年度農業クラブ全国大会のプロジェクト発表会にて最優秀を受賞、指導された北海道立農業大学校の前教務課長、野村博之先生をお招きし、プロジェクト学習講習会を開催。1年生は記録・観察の重要性やチームワークの大切さを、2・3年生はデータの提示方法や基準書の解説など学年に応じて学習。また、大会直前に行われる収穫感謝祭では、農クスクールを開講し、大会内容について詳しく説明しました。すると校内大会の審査講評では審査委員長から、「発表がレベルアップしています」とお褒めの言葉をいただきました。代表になった全ての研究班が地域大会を突破し、全道大会へ出場。クラブ活動発表部門では全道最優秀賞を受賞することができました。

実践3 地域へ魅力を発信！中農農クの新たな挑戦！

昨年度、クラブ員が大きな成果を上げて、発信する場が少なく、地域へ情報を届けられなかったことが次年度の課題としてありました。そこで春季リーダー研修会では発信の方法を検討したところ、中標津町は大手ラジオ放送局が聞けなく、農作業中や公共施設に



は、コミュニティー放送 FM はなが流れていることに着目。町民の情報源はラジオであることを確認し、番組制作をスタートしました。

番組名は地域と中農が家族のような距離感になりたいと願い「月刊中農ファミリー」に決定。月に1度の定期放送を目指し、スポンサーには、3団体に協力を依頼。各会長さんからは「思う存分、PRしてください」とお墨付きをいただきました。それでは実際のラジオ放送をお聞きください（…ラジオ放送を視聴…）



番組内では、研究班活動の紹介や各種コンテストの結果報告、海外酪農研修時には開局以来初のニュージーランド海外中継を実現させるなど、町民の関心を引き出すための工夫を実践。放送後、リスナーさんからは「懐かしい!」「こんな活動をしているんだ」と、OB・OG問わず嬉しいコメントが多く寄せられました。

しかし、何よりクラブ員が自分の成果が発信されているという自覚を持ってもらうために、リアルタイムで校内放送を実施。クラブ員の91%が成果発表の場として最適!という評価を受けました。これら開かれた農クを実現させたことにより、クラブ員の農ク活動に対する意欲と情熱を向上させることができました。

以上の活動から成果をまとめると、

1. 地域と繋がる活動を進化させることができた
2. 継続性ある三大事業の運営ができた
3. 情報発信によってクラブ員の意欲が向上できた の3点となります。

最後に中標津町長・小林実さんからは「多くの場面で生徒の活躍が見られています。基幹となる農業を守っているのは中農です」とのお言葉をいただき、地域の人には5個のマグネットを使用して見える化調査をすると、平均4.4個。クラブ員は86%が見える化がされたと回答し、農クとまちの共存共栄を確認しました。

【まとめ】

まちの産業を担い、地域とともに歩いていく農業高校。そして、農業学習を深化させていく農業クラブ活動の可能性は、無限大です。

産業活性化に向け農業クラブが貢献できること。それは、“クラブ員が輝ける組織づくり”に基づいた、三大事業の充実化です。私たち中農・農クは「見える化」というキーワードを三大目標に沿いながら活動をすすめています。

そのすべての活動は、「まちの産業は私たちが守る」、そして「まちの未来を築くのは私たち」という強い思いが、新たな世代へ継承し、発展させ、輝いていきます。

中農・農クがはっきり見えた瞬間、私たち中農クラブ員の魅力は、全開です。